



昨年文化勲章を得られた日本画壇の巨匠、小野竹喬先生は、「日本人は、元来、さわやかな、すがすがしい芸術作品を求めてやまない。西欧風のごてごてしたものよりも、あっさりとした、さらっとした精神の香りを求めてやまない。私は死ぬまで、そういう作品を画きつづけたい。」と、あるとき話しておられた。

関西学院グリークラブの音楽は、慶応ワグネルのそれにくらべると、昔から、何か日本的であるように思える。油絵的というよりも、水墨画的であり、水彩画的である。それが、こよなく美しいし、私は関学グリーのそういうところが好きである。いや、私だけではなく、昔から数え切れないくらい沢山の人が華麗なハーモニーの水彩画や、うねりの強いフレージングの山水画を求めてやまないのだろう。

今宵もそうした伝統的芸術作品を、静かな感動をおぼえながら、沢山の人が耳をすましてきき続ける。すばらしい冬の夜の出来事である。

演奏会のご成功と今後のご発展を祈る。

多田武彦

作曲家